

各地で話題の病害虫

スモモヒメシンクイ

学名：*Grapholita dimorpha* Komai

本種は、スモモの主要害虫として知られており、本州北部及び中部に分布するとされている。近年、本種によるスモモの被害が多発している中、2004年にリンゴへの寄生が疑われ、2005年3月、長野県においてリンゴへの寄生が初めて確認された。

本種は開張12～15mmの小蛾類。成虫の翅



は黒褐色で線状の細かい模様がみられる。卵は長径約0.9mmのやや扁平な形で、果実表面に産み付けられ、

ふ化後、卵殻は果実表面に残る。幼虫の若・中齢期は白色で頭部が黒く、老齢期は体全体が赤みを帯び、体長が10～13mmになる。形態は卵から成虫の全てのステージでナシヒメシンクイに酷似する。

ふ化した幼虫は始め果皮下にトンネルを作りながら摂食し、食害痕を残す。老熟幼虫は、土中で蛹化する越冬世代を除き、果実の内側から果皮に楕円形の切り込みを入れ、蛹室を作り、その中で蛹化する。蛹室を作らないナシヒメシンクイとはこの点で異なる。本種の寄生樹種としてはスモモの他にボケ、クサボケが知られている。



長野県の調査によると成虫の発生回数は年3～4回と推定されており、リンゴでの被害は8月下旬以降に発生する第3世代幼虫によるものと考えられる。

リンゴに対し薬剤防除する場合には、主に第3世代のふ化幼虫が発生する頃からシンクイムシ類に登録のある薬剤を散布する。被害果を発見した場合は、土中に埋めるなど、その都度果実内の幼虫の駆除に努めることが重要である。

写真提供：長野県果樹試験場病害虫土壌肥料部

退緑斑紋病（仮称）

ウイルス名：Capsicum chlorosis virus (CaCV)

2002年12月、高知県の施設栽培のピーマンで、葉に輪紋症状や退緑斑紋が生じる等の被害が発生し、同県にこれまで発生しているものとは違うウイルス病であることが疑われた。九州沖縄農業研究センターによる同定の結果、日本では未確認のCapsicum chlorosis virusによる病害であることが明らかになった。2003年以降も同県において発生が確認され、2005年3月に退緑斑紋病（仮称）として報告された。



本ウイルス病の発生は、海外では、1999年にオーストラリアにおいてトウガラシ類とトマト、2005年にタイにおいてトマトで報告されている。

葉の病徴は極めて特徴的で、退緑斑紋症状や明瞭な輪紋症状を生じ、軽度ではあるが奇形となる場合もある。果実では、奇形や軽度のモザイク症状を生じる。また、現在のところ発生は株単位で、ほ場内で多発した事例は報告されていない。

本ウイルスはトスポウイルスに属し、他のトスポウイルスと同様、アザミウマ類が媒介するが、媒介種については現在調査中である。

本ウイルス病のまん延を防止するためには、病徴の見られる株を速やかに除去し、焼却するか土中に埋める。また、媒介虫であるアザミウマ類の防除とハウス内への侵入防止も重要であり、薬剤防除の他、シルバーマルチの使用、ハウス開口部への寒冷沙被覆、栽培終了時のハウスの蒸し込み、ハウス周辺の雑草の刈り取り等の対策が効果的である。



写真提供：高知県農業技術センター 竹内 繁治 氏